

平成 28 年度 入学試験問題

(第 1 次)

国 語

〔 50 分 〕

〔 注 意 事 項 〕

1. 指示があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
2. 解答は、すべて別の解答用紙に記入して下さい。
3. 解答の際には、句読点やカギカッコなどの符号も字数に
ふくむものとします。

世 田 谷 学 園 中 学 校

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

シイの木のうちから時間旅行ができると知った朔は、その兄弟である真木とあかり（アーちゃん）との「三人組」で一九八〇年代の現在から約百二十年前の一八六四年へと向かった。そこで農民の逃散を助けるなどして投獄されたと言い伝えられているメイスケさんを助けようとした。しかし、朔たちはメイスケさんの救出に失敗してしまう。朔は現在に戻ってもそのことを引きずっている。朔たちは、友達の新とカッチャン、そしてムー小父さんという時間旅行のことを知っている三人と一緒に河原に遊びに来た。

第一場面

（河原でおやつを食べていると、新とカッチャンが行ってきた講演会の話になった。）

① おやつを食べている時、

——カッチャンは、県庁から来た人の夏休み講演会から、出て行くようにいわれたんだって？ とムー小父さんが問いかけた。

——「そこで、きみたちはなにをしようと思う？」という質問に答えただけやから、とカッチャンは内容を話そうとしなかった。

追い出されたので、Xを立ててるんだ、とあかりは思った。

かわりに新が話した。

——「未来のこの谷間は、どうなっているだろう？」という講演だったんです。

県庁の人は、農業の専門家で、トマトの新しい栽培法の話をしました。岩鼻を崩したあとが細長い空き地になってますね。

その全体を温室の農場にする計画です。

いちばん低い、これまでも畑だった地面にトマトを一本だけ植えて、その茎が、以前岩鼻のあった高みまで伸びるように栽培する。そのトマトの木だけで、大きい温室いっぱい、一万三千個の実をならせるそうです。

タテにこまかく区切った段ごとに収穫して、高さを利用して、谷間に待つてるトラックにパイプで送る。そのまま出荷する……

そのように話して、「そこで、きみたちはなにをしようと思う？」という質問が出されました。中学生が、自分は何にしようと思うか、答えを紙に描く。

絵に描いてる間に、何人か口で説明することをもとめられたわけです。

——カッチャンはどういう話をしたんだ？

あらためてムー小父さんに聞かれたカッチャンは、あまり気がのらない顔つき。それでもカッチャンはこの出番を待ってたんだ、とあかりは感じていた。朔もいまは楽しそうな興味を示していた。

——ぼくは大工道具の箱をかついで行く、と答えた、とカッチャンはいった。

一本で一万三千個の収穫があるトマトの木を、ノコギリでひこうと思う！ うちトマト農家やからね。みんな笑った。とくに朔が愉快そうだった。

あかりは、もう朔が新とカッチャンに、この前の旅の話をしてるんだ、と思った。それも朔は、持って行った大工道具でメイスケさんが脱獄しなかったことを残念がって話したのだろう……

その気持ちをくみとって、カッチャンはノコギリの話をするために、わざわざ講演で追い出される失敗をやっておいたのだ。

第二場面

（話題が変わり、「三人組」が未来へ行かないことに対して、ムー小父さんがその理由を尋ねた。）

——そういえば^②「三人組」はどうして、シイの木の下から未来へ行こうとしなかったんだろう？ と、ムー小父さんがいった。

——そうだよ、あてにしていることがあったのに、とカッチャンもいった。

朔は笑わないで答えた。

——過去に行つてメイスケさんに会つて、あの人が困つた状態にいるのに自分は役に立たない。それが苦しかったからね。今度は……

と、まだ話している朔を^③さえぎつて、新が、

——困つた状態でもメイスケさんがどれだけ、やんとしてたかは、見てきてもらったよ、といった。

——……今度は未来に行つて、いま自分が生きてることが「むいみ」だとわかったら、もっと苦しいからね。

朔はそう言いたして、^④ふちの深みをにらむようにした。

新は朔に自分のいったことを無視されても、^⑤めげなかった。

——サクちゃん、この前から、あんなこと「むいみ」だったというからね、考えてみたんだ。

過去はすでにあつたことだから、変えられない。それでも過去に行つてみてね、メイスケさんという人がもっと深くわかつたということは、「むいみ」じゃないよ。いまのほくらにとつて……

そして未来は、まだきまつてないものだね。いま生きてる者の働きで、どんなものにもなるんじゃないの？

川がこ、こまで流れて来てるだろう？ こ、こをいまとするよ。こ、こまで流れて来た、川上のことは過去だ。もう変えられない。しかしね、こ、こから流れて行く川下は、変えられるよ。

たとえば、こ、こにダムを造つたらどうなる？ いま、こ、こをどうするかで、未来は変えられるんじゃないか？

「夢を見る人」のタイムマシンに乗つて行つて、未来の世界を見て、そこがい、やだったからね。いまの時代に帰つて来て、そんなふうじゃない未来にするように、なにかやることはできるよ。まだ起こつてない未来がさ、いまからきまつてしまつてははずはないよ。

——それこそ「むいみ」もののね、いま、どんなふうにも生きて、未来は、ひとつにきまつてるとしたら……

朔が強い声でいった。あかりはこんな「Y」な弟を見ることは、この四日間なかつたと思つた。

第三場面

（河原でおやつを食べた朔たちは講演会での絵を中学校に見に来た。）

カッチャンが、掛^かかっている絵を三枚、手前に並べかえた。やはり森のくぼみにそつて建てられているので、覆^{おほ}いをした階段のような温室。その低いところに見えるトマトの木の根方^{ねかた}を、切っている子供。

——ノコギリを持った子供は、みんな同じロゴのTシャツを着てるのね。

カッチャンがモデル？

あかりがそうたずねたのは、泳いだ後カッチャンが着がえたTシャツにも、1864—2064という黒いロゴがついてたからだ。

——このTシャツは、「逃散」二百年クラブで作つた、とカッチャンは得意そうだった。

メイスケさんは、未来の子供に覚えられていると聞いて喜んだ。そうだよな？ それでクラブを作つて、本町のスーパーにTシャツを注文したんだ。

サイズもロゴの色も、いろいろあります。注文すればすぐ作つてくれるし、二十枚を越えた分から割引きになつてるよ。

—— 私たちにも、三枚、おねがいします、とあかりはいった。
でも、新さんはこういう子供じみてること、好きじゃないでしょう？

—— クラブもシャツのロゴも、新のイメージだよ、なにも作りかえていない、とカッチャンはいった。

第四場面

（中学校で絵を見て帰宅すると、朔は未来へ行くことをあかりと真木に提案した。）

朔はあかりにくわしく自分の考えをのべた。

—— アーちゃんと真木さんが、ムー小父さんの車で帰った後ね、新とカッチャンとで話したんだ。

カッチャンが、「逃散」から二百年というようなことをいったでしょう？ ああいう時、ぼくはもう死んでる自分とか、ひどい老人になった自分とかに頭がゆくんだよ、われながらのんき坊主のくせにさ。

⑥ パパがね、ぼくを気の毒だ、といったこともあるよ。その性格は、自分から伝わってるようだとき。

ところがそのパパが、ひどい老人になった日のことを想像するより、いま現実、子供である自分を見よ、といって来たんだ。

そして新はさ、ぼくが未来の世界に行っていやだったら、いまに帰って来て、そうじゃない未来を作ればいい、といったんだ。

新は実際にね、この土地で、⑦ 自分らがやって行くことの準備をしよう、としてるんだよ。

（大江健三郎『二百年の子供』——一部改変——による）

⑤ うろ……木の中身が空洞くうどうになっているところ。

逃散……領主の圧政から農民が他の土地へ集団で逃げること。

岩鼻……「三人組」が生活する森の谷間の崖がけから突起した大きな岩。崩くずれされてしまっただけ今はなくなっている。

問一 ☐ X に体の一部を表す漢字一字をおぎない、☐ X を立てる」という形で「怒おこる」という意味となる慣用句を完成させなさい。

問二 ☐ Y に当てはまる語句を次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ロマンティック イ グローバル ウ ユニーク エ ポジティブ オ ミステリアス

問三 ――線①「おやつを食べている時」とありますが、**第一場面**においてあかりは(A)カッチャンと(B)朔の様子をどのようにとらえていますか。その説明として適当なものをそれぞれ次のア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

(A) カッチャン

ア みんなの前でおどけることで、その場の雰囲気^{ふんいき}を明るくして楽しんでもらおうとしている。
イ あかりの前でおどけることで、過去からかえってきたあかりを元気づけようとしている。
ウ 新の前でおどけることで、自分のひょうきんな一面をさりげなく演出しようとしている。
エ ムー小父さんの前でおどけることで、悪気があったのではないと弁明しようとしている。
オ 朔の前でおどけることで、メイスケさんを救出できなかった朔をばげまそうとしている。

(B) 朔

ア 河原での時間を満喫^{まんきつ}していたが、カッチャンの面白い話を聞いてさらに楽しい気持ちになっている。
イ それまでトマト農家について考えたことがなかったが、少しずつ興味をもち始めている。
ウ メイスケさんを助けられなかったことを悔^くやんでいたが、そのことを忘れて楽しんでいる。
エ 講演会から追い出されたと聞いて心配していたが、カッチャンの話す様子を見てほっとしている。
オ 過去へ行ったときのことが気になって気持ちが落ち込^こんでいたが、元氣を取り戻しつつある。

問四

――線②「『三人組』はどうして、シイの木のうろから未来へ行くこうとしなかったんだろう」とありますが、朔が未来に行きたがらない理由はどのようなものだと考えられますか。その理由を「否定」という言葉を用いて、「を恐^{おそ}れているから。」につながる形で二十字以内で答えなさい。

問五

――線③「さえぎって」、――線⑤「めげなかった」とありますが、この時の朔に対する新の説得の内容として適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 時間旅行ができない自分たちにとっては朔の話が全てなので、ぜひ未来を見に行つてその様子を教えてほしい。
イ 過去を変えることはできないが、「いま」がもつ意味を理解するために過去に行くことは無意味なことではない。
ウ 過去へ行つて得た経験は人生にいかすことができ、未来は「いま」を生きる者の行動で変えることができる。
エ 過去はすでに起こったことで変えることはできないが、未来は過去とつなげることによって変えることができる。
オ 絶対に変えることのできない過去にいつまでもとらわれるのではなく、未来に目を向けて生きるべきである。

問六 ――線④「ふちの深みをにらむようにした」とありますが、このときの朔の心情として適当なものを次のア～カの中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア すでに決まっている過去を変えようとすることに對する諦め。
- イ 失敗にとらわれて挑戦する勇氣を出せない自分に対する怒り。
- ウ これからの自分を待ち受ける「むいみ」な人生に対する絶望。
- エ メイスケさんを助けることができなかったことに對する後悔。
- オ 自分の気持ちを考えずに話を押し付けて来る新に対する不満。
- カ メイスケさんを助け出さなくてはならない状況に対する焦り。

問七 ――線⑥「パパがね、ぼくを氣の毒だ、といったこともあるよ」とありますが、どのような点が氣の毒なのですか。適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 普段は明るくものごとを考えようとしているのに、未来のことを想像すると、自分がいなくても存在し続ける世界が思い浮かんで人生に絶望してしまう点。
- イ 普段はものごとを樂觀的にとらえているのに、未来のことを想像すると、何もできなかった未来の自分がまず最初に思い浮かんで怖気づいてしまう点。
- ウ 普段はのんびりとしているのに、未来のことを想像すると、自分が立派な人生を送れるかどうか心配になって行動を起こさずにはいられなくなってしまう点。

- エ 普段は落ち着いているのに、未来のことを想像すると、自分が情けない人間になっているに違いないと思ひ込んで何もかもがどうでもよくなってしまう点。
- オ 普段は都合のいいようにものごとをとらえるのに、未来のことを想像すると、自分は幸福な人生を全うできないに違いないと確信して落ち込んでしまう点。

問八 ――線⑦「自分らがやって行くこと」とありますが、「Tシャツ」のロゴに込められた思いに注目したとき、新がやろうとしていることはどのようなことだと考えられますか。適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 村の歴史を保存し、それをいかして未来を創造すること。
- イ 非現実的な農業計画を阻止し、村の伝統を保護すること。
- ウ 村の古い歴史を発掘し、それを現代の人々に広めること。
- エ 自分たちで言い伝えを研究し、メイスケさんを助けること。
- オ 自分たちの故郷をよく知り、それに関するクラブを作ること。

第四場面

の後で朔は「未来へ行こう」と思うようになります。このことについて次の問（Ⅰ）・（Ⅱ）に答えなさい。

（Ⅰ）朔はどのようなことをきっかけとして「未来へ行こう」と思うようになったのでしょうか。父の言葉を聞いたことと新から説得されたこと以外で、そのきっかけとなったことを二十五字以内で答えなさい。

（Ⅱ）なぜ朔は「未来へ行こう」と思うようになったのですか。その理由を五十五字以内で説明しなさい。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ある時期、一部の公共図書館で、図書館員による本の選択は市民に対する越権行為である、という議論が大真面目になされたことがありました。①その議論は、子どもの本にもあてはめられ、図書館員が本を選ぶのは、子どもが自由に読みたいものを選ぶ権利を妨げる行為だと考える人が現れました。自由とか権利とかいわれると、もつともらしく聞こえるかもしれませんが、こうした議論は、ほんとうに子どもを尊重したものといえるでしょうか。

図書館員が本を選ばないということは、出版されたものは無条件ですべて購入し、読者に好きなように選ばせるということだと思います（さきに、図書館が全出版物の何パーセントを購入するかを競った例があると書いたのを覚えていらっしゃるでしょうか（②本文より前の部分に、そのような記述があったのを受けている）。では、出版社は、どうやって出版する本を決めているのでしょうか。持ち込まれた原稿を ☐ X から ☐ Y へすべて本にしているわけではありませんまい。依頼原稿でも、自社の基準に満たないものであれば、書き直しを求めるでしょうし、持ち込み原稿であれば、売れる可能性を含めて、あらゆる点から検討して、選んだものを出版しているはずですよ。とすれば、図書館が選ばないということは、出版社の選択にすべてを委ねるということにはかならず、図書館としての権利も責任も放棄するということにはかなりません。

図書館で本を選ぶのは、そこで働く職員です。朝、たんすのなかから、今日着る服を選び、自分の好みで選んだ朝食をとり、チャンネルを選んでテレビを見て……いるその人たちが、^②本だけは選ばないということはおかしいことだと思います。

いい選択ができるかどうか自信がない、自分にそれだけの知識や判断力がないとためらう気持ちがあるというのはわかります。何年経験を積んでも、本を選ぶときには、迷うものです。ためらいや迷いは、選択にはついてまわるものです。でも、日本人らしい表現でいえば、^③縁があつて図書館という場に置かれたのであれば、知識や経験が乏しいのであれば乏し

いなりに、自分の力のぎりぎりのところで、^③ 本を選ぶという与えられた仕事に取り組むべきではないでしょうか。読者の選ぶ権利を保障する、などということばのかげにかくれて自分の責務を逃れようとするのは、自分で自分を ^A ないがしろにすることだと思います。

さらにいえば、選ばないという考え方は、ものには質の違いがないという考え方に通じます。^④ でも、質のよしあしはたしかにあります。あるTシャツは、一度の洗濯で首回りがだらしないのびてしまいが、別のは何度洗ってもしつかりしているというようなことは、わたしたちが日常体験しているところです。本の質は、生活用品に比べてわかりにくいことはあるかもしれませんが、本に質のよしあしがないとはいえません。たとえば、ある料理の本は、書かれている通りにすれば、ちゃんとしたものができのに対し、別の本は、説明不足でよくわからない、その通りしようとしてもうまくいかない、ということが、事実あるのです。

わたしの知人でアメリカの高校で作文を教えている人がいますが、彼は、生徒たちに「ピーナッツバターとジャムのサンドイッチのつくりかた」という題で文章を書かせ、本人が書いた文章通りに、教室で ^⑤ ピーナッツバターとジャムのサンドイッチをつくらせるという授業をしているそうです。生徒たちは、最初、そんなこと簡単さ、と思うようですが、材料や必要な器具、手順をきちんと書ける子は少なく、生徒によっては、パンでなく自分の手のひらに、指でピーナッツバターを塗る破目になって教室中が笑いの渦になることもあるとか。あちこちがベトベトになりはするものの、その結果、生徒たちは、何かを正確に伝える、ものごとを順を追って説明するということの大事さは理解するようだ、とはこの先生の言でした。

こんな簡単なことでも、^⑥ 伝え方のよしあしによっては、結果に大きな差が出るのです。本がことばによって何かを伝えるものだとすれば、伝える内容の重さ、軽さ、著者が本にこめた気持ちの深さ、浅さ、そして、その表現の正確さ、適切さ、さらには美しさに違いがあるのは当然です。それが質であり、質の違いを認めることが選ぶことにつながるのです。

作家や芸術家、研究者、思想家など、ものを創り出す人たちは、それぞれ、自分たちの作品をより美しいもの、より真実なもの——より質の高いものへ近づけようと努力を重ねています。そうした努力の結果生み出された作品の質の違いを認めて、それを選ぶことは、創作者の努力を認め励ますことであり、選ばない——質の違いを認めない——ことは、こうした人々の努力をむなしものとするのだといえないでしょうか。作品を享受する人も、選ぶことによって、創り出される作品の質の維持・向上に参加しているのです。

〔I〕 責任をもって選ぶことを避ける。……とにかく全部を提供して、あとは読者の判断に委ねる。……これがどれほど文化的混乱を生じさせているかわからない。せつかくの知的探究のエネルギーも対象が絞られていないために、拡散して不毛に終わってしまうのである。

これは、外山滋比古氏の『エディタースhip』からの引用です。日本で明治以降、すぐれたアンソロジー(詞華集)が出ないことを、エディタースhipの不在という視点から論じた「アンソロジー」という章のなかに出てきたことばです。エディターは編集者のことで、エディタースhipは、ふつう編集者の仕事、職分、権限などを指すことばですが、外山氏は、これを広く人間の知的活動のさまざまな領域にあてはめて興味深い論を展開しておられます。そのエディタースhipの核をなすのが「選ぶ」という行為です。

わたしは、この本のエディタースhipを、そのままライブラリアンシップ(図書館員の仕事)と置き換えて読み、核心に触れる示唆を数多く受けました。「選ぶには、棄てなくてはならない……。棄てるには永続性のある価値は何かがはっきりしていなくてはならない。……(アンソロジーの編者は、)後世へ価値あるものを伝承していく関所を預かっているようなもの

のである」などということばは、^⑦まさに図書館員に向かって振り下ろされた警策のようになんて思えます。

図書館における図書選択のなかでも、子どもの本の選書が特別の意味をもっていることは、すでに述べました。あつという間に過ぎ去る子ども時代、それも、いそがしすぎる現代の子どもの生活のなかで、本を読む時間はこれまでになく貴重なものになっています。そうであればなおのこと、子どもたちには、その貴重な機会に、心底おもしろいと思える本に出会ってもらいたいと願います。

身近にいる子どもにであれ、図書館員としてであれ、だれかに本を選ぶときに働くのは、基本的に親切心——多少のおせっかいのまじった愛情——だと、わたしは思っています。人は、美しいものを見たとき、おいしいものを食べたとき、おもしろい出来事に遭遇したとき、家族であれ、友人であれ、愛する者に、同じものを見せてやりたい、食べさせてやりたい、その話をしてやりたいと願うものです。それと同じことです。自分のところに深く訴^うえる本、自分の目^Bを開かせてくれた本、たのしい思いを味わわせてくれた本があるなら、その体験をだれかと分かち合いたいと願うのは自然なことです。それが選ぶという行為になるのです。

わたしには、折あるごとに思い出し、その都度、ほんとうにそうだ、と確認し、胸に収めてきたことばがあります。大学時代に読んだ岩波新書の一冊『教育入門』という本のなかに出てきた、イギリスのJ・F・ウォルフendenという人のことばです。

〔Ⅱ〕 教育は基本的には一人の人が他の人にたいして与える影響だ……どんな場合にも、この影響は一人の人の心、ひとつのパーソナリティー、ひとつの人格が他の人に与えるものだ。いずれにせよ、そこからすべてのものが始るのである。

（松岡享子『子どもと本』——一部改変——による）

⑨ 享受……自分のものとする。また、自分のものとして楽しむこと。

不毛……みるべき成果がないこと。

外山滋比古……日本の英文学者、言語学者、評論家。

アンソロジー……一定の主題・形式などによる作品の選集。

示唆……それとなく示し教えること。

警策……坐禅^{ざぜん}のとき、修行者の肩^{かた}ないし背中を打つための棒。

J・F・ウォルフenden……教育学者。

問一 ―線 A・B の本文中における意味として適当なものをそれぞれ次のア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- A ないがしろにする
ア 馬鹿にしたり軽く扱ったりする
イ 無意識のうちに守ろうとする
ウ 居場所をなくしてしまう
エ 傷つけたり苦しめたりする
オ 成長の機会を奪ってしまう

B 目を開かせる

- ア 見て楽しいと思うようにさせる
イ 知識を得させたり、真理を悟らせたりする
ウ 自分の迷いや誤りを自覚させる
エ あちこちに注意を向けさせる
オ あまりの美しさに見とれさせ、夢中にする

問二 ☐ X ・ ☐ Y に当てはまる字をそれぞれ漢字一字ずつで答えなさい。ただし、☐ X ・ ☐ Y には対となる漢字が入ります。

問三 ―線①「その議論」とありますが、これはどういう内容のものだったと考えられますか。その説明として適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア どの本を入れるかを図書館員が選ぶことによって、人々は好きな本を自由に手に取ることができなくなってしまうというもの。
イ 図書館員が選んだ本を人々に押し付けることによって、人々は読みたい本を読まなくてはいけなくなってしまうというもの。
ウ どの本を入れるかを図書館員が選ぶことによって、市民が本来持っているはずの権利が完全に奪い去られてしまうというもの。
エ 図書館員が選んだ本を子どもたちに読ませることによって、子どもたちの考えや価値観がある方向へ偏ってしまおうというもの。
オ どの本を入れるかを図書館員が選ぶことによって、子どもたちが自由に自分の読みたい本を選べなくなってしまうというもの。

問四 ―線②「本だけは選ばない」ということはおかしいことだと思います」とありますが、筆者はなぜ「本だけは」と取り立てて言うのですか。その理由を四十字以上五十字以内で説明しなさい。

問五 ― 線③「本を選ぶという与えられた仕事」とありますが、図書館員が本を選ぶ際、どのような感情を持ってしまう

可能性があるかと筆者は考えていますか。その感情として適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 権利や責任を果たそうとする気持ちから生まれる迷い。

イ 数多くの本に接していないことから生まれる苦手意識。

ウ 知識や判断力が十分でないという気持ちからくるためらい。

エ 図書館での経験が浅く自信が持てないことからくる開き直り。

オ 普通ふつうの人に比べて本を知っていることから逆に生まれる不安。

問六 ― 線④「でも、質のよしあしはたしかにあります」とありますが、そのような考え方や姿勢は最終的にどのような

ことにつながると考えられますか。それを示している適当な箇所かじよを二つ探し、それぞれ十五字程度でぬき出して答えなさい。ただし、ぬき出す範囲は――線④より後から引用〔エ〕の前までとします。

問七 ― 線⑤「ピーナッツバターとジャムのサンドイッチをつくらせるという授業」について、この授業を通して生徒た

ちが学ぶことは何だと考えられますか。次のア～カの中から、適当なものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア ピーナッツバターとジャムのサンドイッチのつくりかた。

イ 自分の手のひらに、指でピーナッツバターを塗ることの恥はずかしさ。

ウ 何かを正確に伝える、ものごとを順を追って説明するということの大事さ。

エ ピーナッツバターには質の違いがあるということ。

オ 表現には質の違いがあるということ。

カ ものを創り出す人たちは努力を重ねていること。

問八 ― 線⑥「伝え方のよしあしによっては、結果に大きな差が出る」とありますが、次に挙げる文のうち、複数の意味

が生じず誤解が少ないものはどれですか。適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 一郎が好きな女の子が丘おかの上に立っている。

イ 警官は汗あせを流しながら逃にげる犯人を追った。

ウ 茶色い目の犬を飼っている女の子に会う。

エ 通里にはまったく人の気配けはいがなかった。

オ ここではきものをぬいでください。

問九 ――線⑦「まさに図書館員に向かって振り下ろされた警策のようにさえ思えます」とありますが、それはなぜですか。

その理由として適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 図書館で本を選ぶ際には、一時期の流行ではなく後世に残るものを選ぶことが大切だということを教えてくれる
そのことばによって、自分の選択が正しいことを確認し安心することができるから。

イ エディタースhipをライブランシップに置き換えて読むことができるそのことばによって、筆者は図書館員
の仕事をする上で核心に触れるような大切な気づきを数多く得ることができたから。

ウ 個人の趣味を優先するのではなく後世へ価値あるものを伝承していくことの大切さを説くそのことばは、図書館員
が本を選ぶときについて陥りがちな自己満足的選択の危うさを意識させてくれるから。

エ 図書館で本を選ぶ際には、永続性のある価値を持っている古典こそを選ぶべきだというそのことばによって、改
めて初心に返り図書館員としての仕事に一生懸命取り組みることができるから。

オ 後世に残すべき価値は何かという見識や信念を持っていなければ本を選ぶことはできないというそのことばは、
果たして自分はそれらを持っているのかという問いを突きつけてくるから。

問十 筆者は本を選ぶという行為にはどのようなことが必要だと考えていますか。本文全体を踏まえて、二点説明しなさい。

三

次の①～⑩の――線部の片仮名を漢字に直しなさい。漢字はバランスを整えて、ていねいに記すこと。

- ① 生徒会長選挙にリッコウホする。
- ② 電車で友人の家をタブねてみようと思う。
- ③ 西の空が夕日にソまる。
- ④ 海底からキンカを引き上げる。
- ⑤ 作業のセイミツさが求められる。
- ⑥ 選手を優勝へとミチビく。
- ⑦ 検査のため、静脈からサイケツする。
- ⑧ レイゾウコを台所に運び入れる。
- ⑨ 世界イサンへの登録が認められる。
- ⑩ 家族でセントウへ行つてくつろぐ。

國語

解答用紙

受 験 番 号

氏 名

得 点
点

問

問二

問三
A

B

問四

を恐れているから。

問五

問六

問七

問八

[illegible][illegible]

問
一

A

B

問
→

X

Y

問二

問四

問五

問六

[illegible]

問七

問八

問九

間十 一点目

二点目

⑥	①
く	
⑦	②
	ね
⑧	③
	まる
⑨	④
⑩	⑤